

株式会社資生堂

積立休暇 / リフレッシュ休暇 / ソーシャル・スタディーズ・デー

失効の年次有給休暇を60日まで積立て

当社の人事施策は長期雇用を意識しており、社員が安心して働けることを重視しています。そのため、さまざまな制度を設けており、結果として現在の離職率は2%程度に留まっています。

当社の年次有給休暇は6年目からは21日で、翌年まで持ち越した場合の年次有給休暇日数は最大で42日間です。

また、失効する年次有給休暇を「積立休暇」として60日まで積み立てることができます。用途は本人の傷病、家族の介護や看護のほか、法定上は無給の産前産後休業の6週目から8週目に入るまでの2週間については、「積立休暇」を使って有給扱いにすることもできます。

また、私傷病で2週間以上の休暇を取る場合、



汐留オフィス

年次有給休暇に先行して「積立休暇」を利用することができます。「積立休暇」が60日分あれば、休日を除くと約3ヵ月休むことができます。ケガや病気になっても安心というわけです。



勤続20年・30年の「リフレッシュ休暇」にはお祝い金

「リフレッシュ休暇」は、永年にわたり会社に勤務して貢献した社員に対して心身のリフレッシュを図ってもらうことを目的に10年毎に10日~20日休暇を取得できる制度です。また勤続20年、30年では補助金が支給されます。

業務扱いの「ソーシャル・スタディーズ・デー」

通常の業務だけではなく、社員に社会貢献活動を促し、「資生堂の社会科」として学んだことを仕事に活かしてもらうという趣旨で、1993年に「ソーシャル・スタディーズ・デー」制度を導入しました。

これは一般的なボランティア休暇から一歩踏み込んだもので、当社は休暇ではなく業務扱い*としています。ドナー登録、手話活動、PTA、復興ボランティア、UNICEFの活動など、用途は多彩です。部単位で行う地域活動もあれば、CSR部が呼びかけるものもあります。 *年3日間まで取得が可能です。

👉 ここに着目!! (部分とリンクしています)

- 導入に至るまでの背景
- 導入の目的
- 導入のプロセス
- 導入後の効果
- 今後の目標

職場以外で活動するため、ボランティア休暇の場合、個人で保険加入などの手続きをしなければなりません。「ソーシャル・スタディーズ・デー」は業務扱いなので、会社で保険加入手続きを行うなど、個人の負担が軽減され、より積極的に活用してもらうことができます。

■ ソーシャル・スタディーズ・デー(資生堂の社会科)

ボランティア活動、ドナー登録や提供、献血活動、社会活動に役立つ資格・技術・知識の習得(例えば、手話、点字、救命処置など)、地域社会との交流(自治会やPTAなどの活動を含む)、社会問題に関する研究・観察・学習

従業員の7割を占める女性をサポート

当社は女性比率が高く、国内従業員の7割が女性です。そのため、休暇・休業制度も女性を意識したものも多く、育児、介護、看護などに関わる様々な制度があります。

また休暇・休業制度だけでなく、1991年に導入した、育児を支援する時短勤務制度もあります。子どもが小学校3年生まで利用することができ、勤務時間を2時間短くできるため、夕方には保育施設に子どもを迎えに行くことが可能です。

一方で、お客様に接してカウンセリングするビューティーコンサルタントが時短勤務を利用すると、人員が足りなくなるという問題がありました。そこで2007年には不足要員を「カンガルースタッフ」という契約スタッフで補う制度を導入して、時短勤務の利用促進を図っています。

人事部 人事企画室
人事戦略グループリーダー
田村 浩之さん



会社データ
【事業内容】製造(化学)
【従業員数】33,356名(2013年3月31日現在)
【年次有給休暇の取得率】70.03%
【年間休日数】127日
【URL】<http://group.shiseido.co.jp/>

制度活用事例



人事部 人事企画室
労政グループ
浅利 茂樹さん
[リフレッシュ休暇]

「リフレッシュ休暇」を使って学芸員資格を取得

私は2003年に勤続10年の「リフレッシュ休暇」を取ったことがいい思い出です。

その時期は静岡県掛川市にある「資生堂企業資料館」に赴任していて、化粧文化や企業史の研究・執筆、展示会の企画等の仕事に携わっていました。この仕事には博物館法に基づく学芸員という国家資格があります。部内には学芸員として活躍している先輩が何人かいましたので、私もいずれこれを取得しようと思っていました。

資格を取るためには、通信制の大学に入り、さらに博物館実習などのスクーリングを3週間ほど受ける必要があります。私は「リフレッシュ休暇」をこれに充てまして、玉川大学の学芸員課程を無事修了することができました。

実習で初めて扱った縄文土器や掛け軸などの手触りは、自分の心身を文字通りリフレッシュしてくれました。